

令和2年2月12日

太田市議会議長 久保田 俊 様

スマートインターチェンジ[®]周辺整備調査特別委員会 委員長 中村 和正

スマートインターチェンジ周辺整備調査特別委員会視察報告書

- 1 期 日 令和元年10月24日（木）から
10月25日（金）までの2日間
- 2 視 察 地 神奈川県藤沢市、兵庫県三木市
- 3 視察事項 (1)神奈川県藤沢市議会
①鵜沼海浜公園スケートパークについて
(2)兵庫県三木市議会
①三木スケートボードパークについて
- 4 派遣委員 8名
委員長 中村 和正 副委員長 長 ただすけ
委 員 前田 純也 委 員 松浦 武志
委 員 八長 孝之 委 員 水野 正己
委 員 大川 敬道 委 員 矢部 伸幸
- 5 随 行 者 議会総務課 係長代理 中村 絹子
- 6 視察概要 別添のとおり

(1) 神奈川県藤沢市議会 視察概要

藤沢市の概要 (令和元年10月1日現在)

- ・面積 約 69.56 k m² ・人口 434,568 人 ・世帯数 190,990 世帯
- ・市制施行 昭和15年10月1日
- ・一般会計予算額 (当初) 平成30年度: 1,385 億円
令和 元年度: 1,490 億円
- ・議員定数 36 人
- ・政務活動費 (議員一人当たりの月額) 80,000 円

視察事項

① 「鵠沼海浜公園スケートパークについて」

・目的

鵠沼海浜公園スケートパークは、平成13年から開園している歴史のあるスケートパークである。関東最大級を誇る広さは、約15,000平米あり、初心者から上級者まで楽しめる多彩なセクションを有している。また、スケートボードだけでなく、インラインスケートやBMXなどのエクストリームスポーツを全般的に楽しめる施設となっており、年間来場者は、毎年2万人を超える。当パークでは、用具のレンタルに加え、スケートボードやインラインスケートのスクールを開催するなど、地域に親しまれ、地域に根差した施設となっており、幼少期から鵠沼海浜公園スケートパークで練習を重ねている子どもたちからは、プロのスケーターを輩出している。

加えて、平成30年11月には、国際レベルのパーク競技が可能な最大高低差3メートルを誇るオールコンクリートのコンビプールが完成し、ますます注目を集める施設となっており、地元のリピーターだけでなく、遠方からの集客も多い。日本においては、数少ない歴史を持つ大型のスケートパークであり、施設のリニューアルも経ているパークであるので、その施設や利用の状況、メンテナンス、管理運営体制などについて詳細に調査し、本市におけるスケートパーク建設と今後の管理運営体制構築への参考とする。

・所感

鵠沼海浜公園スケートパークは、藤沢市の都市公園である鵠沼海浜公園に設置されている。当スケートパークは、都市公園の管理者である藤沢市が設置者とはなっておらず、神奈川県や藤沢市等が出資している第三セクター(株)湘南なぎさパークが、都市公園法第5条の設置許可を受け

て施設を設置し、その管理運営を行っている。2万人を超える集客があっても管理人などを常駐させる体制を考えると、スケートパーク単体で採算ベースに乗せることは難しいとのことであるが、当施設の周辺は、江ノ島などの観光地にも近く、人気のサーフスポットでもあることなどから、設置者がスケートパークに隣接して運営する駐車場には、スケートパークへの来場者以外にも多くの利用があり、その駐車場収入が、スケートパークの運営を助ける構造となっている。この手法は、都市公園自体が、抜群のロケーションにあることで成り立っている面が大きいと感じた。本市においては、直営でのスケートパーク設置であり、当スケートパークのような運営形態はのぞめないが、このようなポテンシャルを持つ恵まれた状況下にあるスケートパークであっても、イベントや無料講習会の開催に加え、利用者を飽きさせない多彩なセクションを展開するなど、設置者の創意工夫が随所に見られたことは、本市としても多いに参考とすべきである。何と云っても、東京オリンピックを控えた絶好のタイミングで国際大会が開催できるだけのコンピブルの建設を実現させたことは、プロスケーターが出場する各種大会の会場となるなど、この施設の魅力や認知度の向上に役立っている。加えて着目したいのは、ストリートエリアとミニランプエリアなどに設置されている置き型のセクションを多くのスケーターが利用していることだ。ストリート系、パーク系などの好むスタイルによって、利用するセクションが異なるので、セクションの豊富さは、スケーターに重要視されるものであろう。本市は、オールコンクリートでのスケートパークの整備を予定しているが、耐久性に優れるといわれるものの、1度作ったセクションを変更することは難しい。より魅力の高いスケートパークとするため、変更を可能とする移動式（置き型）のセクションを設けて、バリエーションを加える手法も有効ではないかとの声も聞かれた。

やはり、本市においても、スケートパーク建設のきっかけは、愛好家たちからの要望書であるので、その方々に整備の段階から参加していただき、より楽しめる施設として、整備していくべきとの意見が出された。

（2）兵庫県三木市議会 視察概要

三木市の概要（令和元年10月1日現在）

- ・面積 176.51 k m² ・人口 77,969 人 ・世帯数 33,598 世帯
- ・市制施行 昭和29年6月1日
- ・一般会計予算額（当初） 平成30年度：316 億円
令和 元年度：327 億円

・議員定数 16人

・政務活動費（議員一人当たりの月額） 10,000円

視察事項

①「三木スケートボードパークについて」

・目的

三木市スケートボードパークは、スケートボード愛好家等からの要望により、無料で楽しめるパブリックパークとして、平成17年4月に開園している。敷地面積は1,800平米と、本市が建設を予定しているスケートパークに比べて小規模であるが、日本で唯一のフルパイプを有するパブリックパークであり、ソチ冬季オリンピックのスノーボードで8位入賞を果たした角野友基選手が、小学生の時に当スケートボードパークで練習していたこともあり、知名度の高いパークである。また、地元スケーターのアイデアにより作られ、建設費を非常に低額に抑えていること、周囲に観覧席を建設する予定があったが、予算の都合により整備されないまま未完成となっていることなど、特徴の多いスケートボードパークである。

当施設は、建設から14年が経過していることもあり、三木市のホームページには、スケートボードパークのコンクリートの表面にひび割れなどの劣化を確認している旨が記載されており、本市の計画するオールコンクリートのスケートパークにおいて懸念される衝撃、摩耗、経年などによるコンクリートの劣化の様子などについて、当施設の現況と保守に係る状況を調査するとともに、低額での建設や無料開放という、本市が想定するものとは違った手法で、地域に根差したパーク運営を果たしている点について、三木市における愛好家との協働の状況、スケートパークの利用状況等を詳細に調査し、本市におけるスケートパーク建設と今後の管理運営体制構築への参考とする。

・所管

三木市スケートボードパークは、調整池を利用して作られたということで、まず、そのアイデアの素晴らしさに感嘆した。さらには、専門業者に設計委託をすることなく、三木市とスケートボードパークの整備を要望した愛好家の方々との協議で、レイアウトや構造が決められたという。日本のパブリックパークで唯一のフルパイプの材料は、特別に作ったものではなく、コンクリート二次製品業者からの提供であり、パークは、左官業者の協力を得て市内造園業者が施工したとのことだ。予算の都合で、計画の3分の1が未整備だが、整備面積920平米に対する建設費は、1,170万円と、驚くほどの低額で行われている。そして、この知恵と工夫と協働が凝縮された、個性を持つスケートボードパーク

は、インターネット等でスケーターに情報が広まり、三木市のスケートボードパークで滑れば、どこでも滑れるなどと話題になり、遠方からの来場者も多く、3, 200人を超える登録者がいるという。

さらに注目したいのは、人を置かずに無料開放というローコストな管理手法である。利用者登録こそ必要であるが、利用については、全て自己責任というスタンスでも、特に大きな問題は起きていないという。このことは、市役所などの公共施設が集積する地区にスケートボードパークが設置されており、見回りが容易だという立地の好条件と愛好家団体に運営を任せていることで地域の目が存在することなどに拠るところが大きいであろうが、大胆な方法にも思えた。本市では、スマートインターチェンジに隣接する立地を生かして、交流人口を増やすという目的があるので、ある程度、大々的にスケートパークの整備をし、建設費などのインシヤルコストのほかに、運営面においても人件費などのランニングコストに多くを費やさざるを得ず、それをどのように補うかという課題認識でいた。しかし、その整備目的が違うとはいえ、三木市において、本市が想定するスタイルとは違う整備手法、管理手法での課題へのアプローチを視察できたことは、非常に刺激になり有意義であった。管理手法については、本市スケートパークの立地等を考えると、安全管理面で同様とすることは難しいかもしれないが、スケートパークの整備需要に対する供給方法や供給規模として、とても堅実であり、かつ知恵が絞られ、また草刈りなどの管理やイベント開催などの運営にも愛好家の方々の尽力がある点について、非常に感心するとともに、これまでの認識とは違う角度からの合理性を知る良い機会となった。

一方、本市において課題として挙げられているコンクリート部分のメンテナンスについては、建設後14年が経過していても、ひび割れ等は見られるも、大掛かりな改修は要しておらず、モルタルの剥離などへの補修程度に収まっており、年間10万円から30万円で済んでいるという面では、懸念が少し軽減された。

いずれにしても、整備段階から運営管理まで、主体として常に愛好家の方々が存在し、その力が注がれることで、スケートボードパークが地域に親しまれ、育てられている様子は、非常に称賛される。本市においても、いかに愛好家の方々を巻き込んで、スケートパークの魅力を高めるか、競技人口を増やすような運営の体制がとれるか、その意義を改めて確認した。

最後に、三木市においては、最近、愛好家団体の会長が不在となって、イベント開催や施設管理ができなくなっているという。キーパーソンの必要性も改めて認識するとともに、愛好家団体の組織を盤石にしておくことの重要性も感じた。